

● 読書感想文コンクール 中学校の部 ●

優秀賞

安蛭 清夏（あんびる さやか）陵南中 3年生

作品名：「アントキノイノチ」を読んで

図 書：アントキノイノチ

私が今まで一番共感した本は、さだまさしさんの「アントキノイノチ」という本だ。

主人公の永島杏平は、高校三年の秋、あるきっかけから学校を中退した。それは、学校の人気者だが、裏表がある松井の行動だった。松井は、日頃から人の陰口を上手に面白おかしく言っていて、さらに根も葉もない噂も流していたが、とても巧妙なので、みんなは陰湿な悪意の存在に気づいていなかつたし、人気が崩れることはなかった。

山本信夫という、杏平や松井と同じ登山部員が、ブログを始めた。ブログは人気を集めていたが、異変が起きた。いわゆるブログ荒らしが始まり、閉鎖に追い込まれてしまった。山本の落胆は可哀想なほどだった。ある日、山木は杏平を呼び出し、その犯人は後で調べたら松井だということがわかったと言った。杏平も山木も既に松井の正体を知っていて、驚きはしなかった。

山本信夫が松井を襲撃した。生徒会長の松井は、生徒会室で会議中だった。ナイフを松井の頭上に振りかざしたが、杏平がそれを止め、山木は警察に引き渡された。そして、自主退学の形で学校を去り、自殺した。松井の蒔いた冷たい炎の種が、ついに死者を出したのだ。そして、杏平は松井への殺意が芽生えた。

その後、松井を殺すチャンスが二度あったが、山木に止められた気がして、殺さなかった。二回目のチャンスのときには、もう心が壊れ始めていて、その日以来学校に来ることはなかった。そして、他人とうまく関われなくなり、三年間鬱々と過ごした。

そんな杏平に父はある仕事を紹介した。それは、遺品整理会社だ。凄惨な現場でも誠実に汗を流す、主任の佐相さんをはじめとする先輩達と働くことで、だんだん精神状態が回復してきたと同時に、命の尊さを改めて感じた。そして、行きつけのお店のゆきちゃんが、とても明るくて励みになった。しかし、ゆきちゃんは杏平と同じ高校で、松井と関係する辛い過去があることを知った。死のうと思ったこともあったけれど、杏平とゆきちゃんは命の尊さに気づき、懸命に毎日を生きていくという内容だ。

あまり日常生活で命について考えることはない。しかし、命を投げだしたくなつたことは、人間なら誰にでも一度はあることではないだろうか。

私は、小さい頃から自分の思っていることを言えない性格で、友達とけんかをした覚えがほとんどない。今思うとそのせいで辛いことのほうが多くて、我慢もしてきた気がする。改善しようと頑張ってきたが、中学二年の後半は、杏平とは少し違うが、心が壊れかけていた。

今までにあった辛いことは、なぜか細かく思い出すことができないが、この本を読んで、また、今の私の状況から、一つの納得できる答えに辿り着いた。多分、今までの人生は私にとって長すぎる冬だったのだと思う。そして今、雪解けの時期だと思う。長い冬があったからこそ我慢強くなり、壊れそうなときもすぐに立て直すことができるようになった。そうなつたことで、最近友人や先生に、一日に五回は「おもしろい」や「最近のびるる好き」などと言われるようになった。自覚はないけれど、理想としている自分に近づいてきたのかもしれないと思った。だから、今が辛くても未来へつなぐ時期だと思って耐えれば、それに値するだけの楽しい時間が待っている、と信じることにした。まだその分を取り返したわけではないし、今も少しあは苦しいこともあるけれど、プラスに考えるほうが人生の中で、辛かった時期が貴重で意味を持つのだと思う。

最近、中学生の自殺について、ニュースでよく取り上げられている気がする。私はそのニュースを見るたびに、その場から逃げ出してもいいのではないかと思う。この本に出てくる松井のような人は世の中にたくさんいるし、もっと酷いことをする人もいる。そんな人が自分を標的にされたのなら、逃げ出してもいいのではないかと思う。私は第三者に何かされたわけではないが、自分の環境から逃げ出したときも、逃げずに支え続けてくれた人がたくさんいた。同様に、誰でも気づかないところで支えてくれる人がいると思う。

「命」がテーマの本なので、本の中でも重い話が多かったが、普段あまり考えないことだからこそ、本を通して大切なことがいろいろと見えてきた。限りある命だから、不完全燃焼で何事も終わらせないように、これから毎日を生き続けていきたいと思う。